

オオミズナギドリの生態の普及啓発

—大阪自然史フェス 2017 ブース展示報告—

京都市山科区 須川恒(すがわひさし)

初ブース展示

毎年秋に大阪市立自然史博物館で開催される大阪自然史フェスティバル(またはバードフェスティバル)の場で、「カラーマーキング鳥類調査グループ・関西」というグループ名で、4回もブース展示をしてきた(須川他 2010; 須川他 2011; 須川 2016; 須川 2017)。今回は、大阪自然史フェスティバル 2017(11月18・19日)の場で、冠島のオオミズナギドリの生態の普及啓発を目的に初のブース展示をしたのでその報告をする。

なおこの内容は、大阪鳥類研究グループ総会(2018年3月11日)の際に「オオミズナギドリの普及啓発 in フェス 2017」というタイトルで発表し、同様の内容を、千葉県柏市東大大気海洋研で開催された日韓オオミズナギドリ生態・保全研究集会(2018年3月24日)で「オオミズナギドリの生態の普及啓発活動の試み」というタイトルでポスター発表をして、展示に使ったグッズの一部も実物を置いて紹介した。

オオミズナギドリの研究(特にバイオロギングがらみのもの)や調査(環境省モニタリング 1000 海鳥による調査など)は最近全国的にすすんでいるが、オオミズナギドリの社会的認知度は低い状態は続いている。オオミズナギドリは「京都府の鳥」となっていて、冠島はオオミズナギドリの集団営巣地として国の天然記念物指定がされていて、毎年調査の様子はローカルには報道されるが、京都府民の認知度もとても低い。京都府に現在ない自然系博物館をつくりたいと希望を持つ諸団体が、自然環境保全京都府ネットワークといった連携をつくって活動をはじめている。将来博物館ができた時には、当然京都府の鳥であるオオミズナギドリの常設展示が行われ、さまざまな普及活動も行われるだろうが、博物館ができるまでに何の準備も必要がないというわけではない。内容は今から考えて整えていく必要がある。「普及啓発」をするとは、言うは簡単だが、とても奥の深い活動と最近痛感している。そのあたりについて書きたい。

ブース展示の内容

写真1のブースの写真に、ブース展示の内容を10にわけ①～⑩の番号をつけて示した。



写真1 京都・冠島調査研究会のブース展示 ①～⑩の番号は10に分けた内容

- ①オオミズナギドリ実物大 ① a 雌、① b 雄
- ②ポスター展示 オオミズナギドリの生活史と標識調査の紹介・幼鳥の巣立ち時の落鳥や渡り・全国の普及啓発状況
- ③プロジェクターによる画像・動画投影 ドローンによる冠島撮影動画・各種 PPT プレゼンスライド・調査時の撮影スライド
- ④オオミズナギドリ標識体験箱・参考表
- ⑤ a 花崎ゆりさん作オオミズナギドリグッズ
- ⑤ b 吉田静佳さん作ポストカード(1枚50円(特別価格))
- ⑤ c 桑原香織さん作雛ぬいぐるみ・成鳥帽子 ⑥オオミズナギドリの巣穴模型
- ⑦冠島のオオミズナギドリについての書籍 ⑧無料配布資料
- ⑨京都大学新聞冠島特集号(一部100円)
- ⑩オオミズナギドリ用調査道具(プライア、ノギス、キャップランプ、体重計)

初ブース展示なので、結構長い間、どんな出し物を展示すると面白いかを考えていた。ねらいがあたった展示内容もあったが、まだねらいが十分実現できていないものもあった。以下、それらを紹介していく。

ブース展示場のサイズや条件

ブースのサイズや条件は、フェスティバルによって違う。大阪自然史フェスティバルでは以下のような形で出展できた。

ブース展示は団体名で申し込みと、無料である。小額の販売は可能だが、作品の販売を主目的とする場合は別のカテゴリーの有料のブース展示がある。

ブースの場所(A49)は、いままでと同じく屋内の花と緑と自然の情報センター2階(ネイチャーホール)だった。ブースのサイズは、120 cm×270 cm(背面の壁の長さ)である。

カラーマーキング鳥類調査グループ関西の時もそうだったが、野鳥長屋とも言える並びに設定してもらったので2日間ブース関係者間で密に交流することが可能だった(図1)。

長机2台と椅子4台、それにPCとプロジェクターのための電源を借りた。準備品は自宅から事務局へ宅急便で送り、終了後自宅での着払いで送り出すことができた。

博物館を支える多くのスタッフにいろいろと教えていただき、また支援していただいたのでスムーズに展示をすすめることができた。

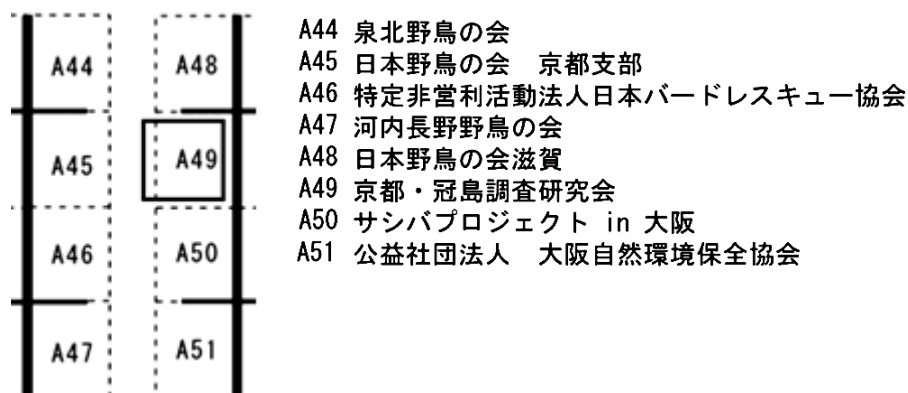


図1 ブースの位置

A49 が京都・冠島調査研究会のブースの位置

ブース展示の内容(①~⑩)の詳細

①オオミズナギドリ実物大 ① a 雌、① b 雄

壁にオオミズナギドリの雌雄別の実物大の飛翔図を貼った。これは 2017 年 8 月の冠島調査の早朝の調査の際に、鳴き声から雌雄がわかって測定した個体を実際に翼を拡げてトレースしたものである。オオミズナギドリは雄のほうが大きく重い、両個体の計測情報も書き添えた。

隣の A48 の日本野鳥の会滋賀のブースでは、オオワシの巨大な飛翔図が目玉だ(写真 1)。またお向かいの A45 の日本野鳥の会京都支部でも、猛禽類の秋の渡りの際に撮られたサシバやハチクマなどの猛禽類の飛翔図(写真を元に加工したもの)が掲示されていた。飛翔図をいかに見せるかは鳥のブース展示で課題となる。バンダーは標識調査時に実寸のトレースをする機会を活かしてさまざまな鳥類の実物大の飛翔図を示すことができるだろう。

②ポスター展示

オオミズナギドリの生活史と標識調査の紹介・幼鳥の巣立ち時の落鳥や渡り・全国の普及啓発状況など多彩な情報を掲示した。調査をしている冠島の位置などに加え、学会などのポスター発表では不要な、オオミズナギドリの一般的な形態や生態がビジュアルに理解できる掲示を追加した。

写真 1 の左側の 1.2m のでっぱり部に一般的な情報を掲示した。その中には福井県越前町織田山にある環境省渡り鳥ステーションから約 65 km 離れた若狭湾上に浮かぶ冠島・杓島の写真を示した。冠島の右に杓島があり、約 2km 離れていることを示した。

壁面の右側には私たちの調査で判ってきたオオミズナギドリの生態についての資料をいろいろと掲示した。生態についていろいろな質問があっても、ここに掲示した図のどれかをもとに説明することが可能だった。

オオミズナギドリは 10 月末から 11 月にかけて巣立ち、その後多数の幼鳥が近畿地方で「迷行落下」することが知られている(吉田 1973)。名古屋大の依田憲さんから提供いただいた資料(Yoda et al. 2017)をもとに、新潟県の粟島で GPS 衛星発信機を装着された幼鳥のルートから、迷って内陸部に入ってくる「迷行」でなく、遺伝的に南方に固定された渡りであることを示した。落下したオオミズナギドリを保護したことがある人や、11 月 10 日頃に琵琶湖湖岸でカモ類の群れの中を飛んでいるオオミズナギドリを観察したことが

ある人には、とても関心を持ってもらえる情報だった。

③プロジェクターによる画像・動画投影 ドローンによる冠島撮影動画・各種 PPT プレゼンスライド・調査時の撮影スライド

2008 年から使っている EPSON の PC プロジェクター(EB-S10)が活躍した。直前にランプ不調の表示が出るがあったので、交換用ランプ(ELPLP58)を急遽購入(12000 円もする)して備えたが、さいわい展示中にランプは切れなかった。

画像・動画のメニューを示した。見せることができるものはドローンによる冠島撮影動画、オオミズナギドリの生態を知ることができる PPT プレゼンのスライド、調査時に撮影された写真のスライドなど多種類あった。投影する画像には個人の肖像もたくさんでくるので撮影禁止との注意書きをした。

いろいろな画像・動画を見せたが、一番受けたのは環境省近畿環境事務所の方から提供いただいた冠島のドローン動画(2017 年 8 月 28 日撮影)だった。冠島の地形や植生をいきいきと伝えることができたのがありがたかった。

④オオミズナギドリ標識体験箱・参考表

冠島における長期のオオミズナギドリの標識調査の雰囲気味わってもらうために「標識体験箱」というしかけを考えた。

おみくじのように箱を振って一個の足環(紙でつくったもの)を出してもらおう。実際に 2016 年の調査で確認された足環番号のうち長寿記録の番号が印刷されている。壁にはあってある参考表から、足環番号に対応した放鳥年月日が判り、成鳥に標識した個体は、少なくとも何歳以上かが判り、幼鳥に標識した個体は何歳かが判る。参考表を見なくても、丸めた足環の裏側に標識年度と何歳か(例えば+20(20 歳以上)、や 20(20 歳))が印刷して判るようにした。

出てくる足環には、2016 年に新たに標識した新放鳥の番号(空色のリング)と、まだ確認されていないが 1972 年標識の黄色い個体番号(交換リングによってトレースできる)も混ぜた。

実際に籤を引く体験をしてもらって出てきた番号から標識年度を知ってその個体の年齢を知る体験をしてもらおうと、とても長寿な個体であることに納得してもらえる。また黄色いリングが出てきたら、交換リングの作業によって 1972 年の個体までトレースでき、またミズナギドリ類(マンクスミズナギドリ)ではとても長寿の記録が知られているので、オオミズナギドリも 44 歳

以上のお宝記録が出てくる可能性も夢ではないと話した。

⑤ a 花崎ゆりさん作オオミズナギドリグッズ

花崎(沼波)ゆりさんは学生時代から何度も冠島の調査に参加していて、また就職してからも何回も調査に参加し、オオミズナギドリの手作りグッズを作成し「おおなぎ屋」としてブース出店してオオミズナギドリの認知度を高める先駆的な活動をしている。2017年11月12日京都市岡崎のみやこメッセで開催された「いきもにあ2017」に出店したのを手伝いに行き、いきものへの関心を深める手作りアートの多くの出店をじっくり見る機会があつたととても楽しめた。大阪自然史フェスティバル2017に「おおなぎ屋」の出店はできなかったので彼女の作品をいくつか展示させてもらった。

⑤ b 吉田静佳さん作ポストカード(1枚50円(特別価格))

吉田静佳さんは舞鶴市出身のイラストレーターで、奄美大島の野生動物のイラスト作品を多く描いている。高校生時代から冠島調査に参加していてオオミズナギドリは野生動物に関心を持った原点とのこと。今回はオオミズナギドリのポストカード3種を提供いただいた。

⑤ c 桑原香織さん作オオミズナギドリの雛のぬいぐるみ・成鳥の帽子

桑原香織さんは自称「工作好きの保育士」さんで、2017年8月の調査に参加して出会ったオオミズナギドリの雛にキュンときて、雛のぬいぐるみを2種と成鳥の帽子の作品をつくり提供いただいた。作品の作成途中の写真をメールで送っていただき期待していた。11月18日早朝に会場に届けられた実物とはじめて対面した。この作品をブースに置くだけでとても威力を発揮した。小さい子が、雛のぬいぐるみが「かわいい」と親とともに近寄ってくるので、オオミズナギドリについて説明するきっかけとできた。

そのうちにこの作品の使い方が判ってきた。

帽子をかぶってもらい、雛のぬいぐるみを持って写真を撮ってもらう(撮らせてもらう)。写真を撮ってもらった人には⑧の無料配布資料を渡して説明するという流れである。オオミズナギドリの親鳥が、かわいい雛を育てることができかどうかが課題となっている。冠島ではドブネズミの捕食が影響を与えているようだし、ノネコが深刻な影響を与えている島(御蔵島や栗島)もあることを紹介した。

⑥オオミズナギドリの巣穴模型

オオミズナギドリの巣穴の模型をつかって巣穴調査の体験をしてもらうというアイデアの半分は実現した。巣穴の模型は、丈夫な米袋の紙で直径約10 cmの筒をつくり、ぺちゃんこにならないように針金で枠をつくり、上に木の葉の柄の布をかぶせてつくった。その奥に、オオミズナギドリの卵や雛、成鳥の模型(ぬいぐるみなど)を置いて LED ライトで巣穴の奥を照らして覗いてもらうというしかけをつくった。

このしかけをつくるために、雛や成鳥のぬいぐるみがあればと桑原さんに話していたことが⑤c で述べた桑原さんの作品の作成につながった。フェスティバルが終わってから、桑原さんは課題として残っていた成鳥のぬいぐるみも作成いただき、3月24日のオオミズナギドリの研究集会において参加者に披露することができた。

実は当初のアイデアは、巣穴の奥が曲がっていても、CCDカメラで画像を得て、PC 経由で③のプロジェクターで投影して見せることで、巣穴調査を体験してもらうことを考えていた。道具はなんとかそろったが、ここまではまだ実現していない。

⑦冠島のオオミズナギドリについての書籍

冠島の自然とオオミズナギドリにかかわる書籍を以下5点展示した。

(1)岡本文良(1972)冠島のオオミズナギドリ—ふしぎな鳥の世界をさぐる (少年少女ノンフィクション 8).小峰書店.

戦後冠島の調査をはじめた東舞鶴高校教師だった吉田直敏氏のオオミズナギドリの生活史探索の物語。地元の漁師がオオミズナギドリは冬もいるという指摘を否定するために冬期に島に渡り、夜にもぬけの空であることを確認している。

(2)吉田直敏(1981)樹に登る海鳥.汐文社.

(3)丹信実(1956)京都府冠島の生物.平安学園教育研究会.(丹信実(1977)オオミズナギドリと冠島.天声社.として再版されている)。丹は1928年から1956年に17回通算94日冠島に滞在して生物地理学的調査をした。オオミズナギドリの一日の生活にみられる行動に適切な名前をつけ、生き生きとした図とともに記述している。

(4)月刊海洋 2016年9月および10月のオオミズナギドリ特集号

オオミズナギドリ -外洋性海鳥の研究最前線- (上)(下)。

ここ数年のオオミズナギドリ研究集会の成果となる出版物である。

(5) 黒田長久のミズナギドリ類の系統(骨の形態比較)についての学位論文

Nagahisa KURODA(1954)On the Classification and Phylogeny of the order Tubinares, Particularly the Shearwaters(Puffinus), with special Considerations on their Osteology and Habit Differentiation(Aves)

日本のミズナギドリ類研究の源流をつくった論文だと思う。

⑧無料配布資料

⑧無料配布資料

～生活史・保護調査～

QRコードから冠島調査研究会のサイトへ
<http://larus.c.ooco.jp/KANMURI.htm>

山本誉士さん提供プレスリリース

図2 無料配布資料の内容

ブース展示では無料配布資料(ハンドアウト)をどのようなものにするのが大切である。ブース訪問者の立場にたってみると 100 以上のブースで何を展示しているのか、ゆっくりと見ている暇などない。まずは、どのようなコンセプトの展示をしているのか伝える必要がある。詳しく知るためにウェ

ブサイトがあり、その QR コードと URL を示しておくことも大切である。
②のポスター展示と対応するビジュアルな図を掲載しておく、説明を受けた情報が頭に残る。さらに短くても何か読み物が掲載されているのもいいかもしれない。

そのような考えの配布資料(B5版で4ページ分)をつくった。QR コードから [冠島調査研究会のウェブサイト](#) に来てもらうと、この4ページの配布資料ファイルもダウンロードできるし、かかっている。オオミズナギドリ(の生活史と標識調査(須川 2006)のうち、吉田静佳さん提供のイラストを2ページわたって掲載した。また4ページ目には、ジオロケータによって冠島を出発した個体が赤道を越えて越冬していることが解明された山本誉士さんのプレスリリース(山本 2013)の一部を読み物として紹介した。

⑨京都大学新聞冠島特集号(一部 100 円)

京都大学新聞社の学生記者高橋佳大さんが 2017 年 5 月冠島の 3 泊 4 日の調査に参加し、また 6 月 1 日の雄島参りの祭りに参加して取材して、京都大学新聞 2017 年 7 月 1 日号に「島と人と海鳥の遺産・冠島」として全紙 2 ページ特集記事を掲載した。冠島と地元の人々の歴史的なつながりを雄島参りの祭りを通して考察し、戦争中の海軍と地元の人々との間にあった事件の紹介、戦後吉田直敏氏がオオミズナギドリの調査を開始した歴史をひもとき、調査への参加体験から、オオミズナギドリの生態をいきいきと描いている。

新聞スタンドのようなものをつくって、一部 100 円で売った。100 円出しても買う人が結構いて驚いた。翌日「なかなか読みでが良かった」と好意的感想を言う人が複数いた。読みでのある物語を求めている人が多いことを知った。11 月 19 日に記者の高橋さんは両親と一緒にブースにやってきた。ちょうど博物館館長の谷田一三さんがやってきたので、高橋記者との記念写真を撮らせてもらい谷田さんへ一部進呈した。なお、冠島調査研究会のサイトから、[この記事へリンク](#) がされて読むことができる。

⑩オオミズナギドリ用調査道具(プライア、ノギス、キャップランプ、体重計)

実際に冠島のオオミズナギドリの調査で使っている調査用具を展示した。雛のぬいぐるみを使って、このような部位の測定(全頭長など)をすると示し、保定具に雛を入れて体重計を使うことを示した。調査員が現地を持参する調

査区画の地図と、標識番号一覧から現地で確認した足環番号からおおよその放鳥年度を知ることができる」と説明して、④の標識体験箱の体験をしてもらった。

ブース展示を巡る考察

以上のような内容を2日間展示していろいろな関心でやってこられる方とさまざまなやりとりをした。やりとりがつまっているためか、あっというまに時間がたっていくのに驚いた。やりとりする際によく使った資料もあれば、あまり使わなかった資料もあった。また、一つのやりとりをきっかけに次々とさまざまな資料を示すことができる展開もあった。

冠島やオオミズナギドリを既に知っていてやってくる人はそんなに多くはない。ほとんど知らないけれども何か関心をもってやってくる人が大半である。前述したように子供がオオミズナギドリのかわいいぬいぐるみに関心を持って近よってくるのはとても大切なポイントだった。アート作品によって、普及啓発の最初のきっかけが得られるのが大きいとあらためて痛感した。

冠島ではテント場にある机のまわりで調査参加者と語らいの場をもつが、展示しているブースは、あたかもテント場が再現されているように感じた。いつもテント場で話し合っている仲間や、かつて参加していた人達が次々とブースに来てくれるのはとても不思議な感覚だった。

今回は冠島のオオミズナギドリの生態の普及啓発のブース展示をし、3月24日に全国から(韓国からも)集まってきたオオミズナギドリの研究者にポスター発表を通してこの活動を紹介した。それは、それぞれの島で進められている最先端の研究を加えた普及啓発活動をすることの重要性を知っていただきたかったからである。そういった活動には冠島のブース展示で使ったさまざまなアイデアやグッズは、共通して役立つ部分が多い。複数の場所でそれぞれの場所の特徴も活かした普及啓発活動を進め、それらの経験の交流をすすめることによって、オオミズナギドリの認知度を国内外に高めることができると思う。

「シジュウカラガン物語」のブース展示

私はこのブース展示をする少し前の11月4～5日に千葉県我孫子市で開催されたジャパンボードフェスティバルに初参加して、宮城県の呉地正行き

んと一緒にシジュウカラガン回復事業の普及啓発を目的とする『シジュウカラガン物語』の初ブース展示にかかわった。サントリー世界愛鳥基金の支援も受けてなかなか面白いブース展示をすることができた。その内容は以下のサイトで紹介している。

<http://larus.c.ooco.jp/ACGSTORY.htm>



写真2 参照ブース展示例「シジュウカラガン物語」(2018年11月4日5日千葉県我孫子市ジャパンバードフェスティバル) ①～⑤の番号は展示内容。北米から輸入したデコイをシジュウカラガンにしたもの(④)の効果が大きく、多くの人達に「復活」のメッセージ(①)の前で記念写真を撮っていただいた。シジュウカラガンが絶滅に瀕し、復活した長期間の物語を伝えるタペストリー(②)と、同じ構成の冊子(⑤)がとても役立った。またタペストリーの両端にある「ふやそう四十雀雁」(③a)「へらそう加奈陀雁」(③b)の巻物も、詳しい地図などもあり、全体の活動をとても説明しやすかった。

ここでは冠島のブースと共通してわかってきた点を紹介したい。

このブースには米国から小型カナダガンの狩猟用デコイを輸入してシジュウカラガンに加工したものを4体置いた。このデコイの効果が大きかった。日本野鳥の会東京支部の石亀明さんが「インスタ映えのする写真が撮れます」と通行者に呼びかけていただき、その効果もあって多くの人達がやってきて、

このデコイを抱いた写真を「復活」のメッセージを発信している展示の前で撮ってもらった(了解を得た場合は撮影させてもらった)。これをきっかけに、シジュウカラガンが絶滅に瀕した経過、復活への長い道のりがあったことを関心を持って聞いていただけた。この長い100年の物語をつたえる上でタペストリー画(ポスターにあたる)が役立ち、同じ構成の冊子をお渡しした(無料配布資料にあたる)。また大きなタペストリーの両端にある「ふやそう四十雀雁」「へらそう加奈陀雁」の巻物(これは今までにつくっていたもの)も、詳しい地図などとともに印刷されているので、全体の活動の構成をととても説明しやすかった。

京都の西本願寺書院や二条城には江戸時代初期に描かれた襖絵で囲まれた「雁の間」がある(大名の格式ごとに「雁の間」「菊の間」といった控室が割り当てられている)。マガンや、なんと希少雁であるハクガンの家族が早朝に沼地から飛び立ち、水田の刈跡で採食し、夕方また沼地にもどってくる情景が描かれている。「雁の間」は400年前の雁のいる風景を現代のわれわれに伝えている。わたしたちは、シジュウカラガンを絶滅直前が追い込まれ、復活させることができた100年の歴史を、次世代に(400年後にも)伝えていくことができる。そういう目でみるとブース展示はいわば現代の「雁の間づくり」(格式を示した部屋の目的とはまったく違うが…)の作業と言えるだろう。

鳥類標識調査を普及啓発するブース展示の構想

ここまでブース展示のやりかたについていろいろ考えてきたのは、アルラ誌の重要な目的である鳥類標識調査の普及啓発をするためのブース展示ができないかと考えているからである。カラーマーキング鳥類調査・関西や冠島調査研究会のブース展示では、関西における鳥類標識調査の一部について普及啓発活動をしてきた。さらに、鳥類標識調査グループ・関西を名乗って、関西における鳥類標識調査活動全体を包括的に普及啓発するブース展示があるのではと考えるようになった。

もちろん、そのためには、また違う切り口の展示内容を考える必要がある。それが何かを考えることは楽しい。ここでは、思いついた構想を少し書く。

冠島調査研究会のブースでは、冠島のテント場にある机上のイメージ、シジュウカラガン物語は、現代の「雁の間」というイメージだった。これらは、演劇における、一幕物の舞台づくりをしていることになる。舞台を彩る大道

具や小道具があって、その舞台で目的とするメッセージが演じられ伝えられる。オオミズナギドリの帽子をかぶって雛を抱く人は、もうこの舞台に参加する役者の一人となる。

では、鳥類調査グループ・関西はどういうイメージのブースでいくとよいか。私は、福井県織田山にある環境省渡り鳥1級ステーションにある調査用の小屋の内部のイメージ(机上とそのまわり)がいいのではと思っている。ここは秋に北から関西にやってくる越冬する小鳥類の渡りの入り口(春だと出口)となる調査地である。壁面の左側には関西を含む大きな地図が貼られていて、主な調査地の位置が示されている。机上には関西の鳥類調査地目録がさりげなく置かれている(別稿の記事を参照)。壁面の中央には、鳥のラベルの下に何かが入っている白い袋がたくさんぶらさがっている(実際に鳥ははいってなくても、そこにはいつかは捕獲されたばかりの小鳥たちであると観客はとらえる)。

壁面の右側には織田山における1日の最多標識記録が2枚はってある。以前はカシラダカがとても多かったのに、最近の記録はカシラダカにかわってアオジが多数捕獲されていることが判る。

この部屋の様子は、映画「鳥の道を越えて」でも上映された。実際に来たことがある人ならば、あとどういったものを壁に貼って、机上にどんな道具や資料を置いておけばよいかのイメージが沸くに違いない。

ブース展示のコツ

ここまでブース展示についてまとめて考察してから、ネットで「ブース展示のコツ」についてどう書かれているのか、いくつかにあたった。企業が会社の事業の広報にどうブースを出すかについての助言が多く書かれていた。このようなブース展示は経費もかけて行っているのだが、基本的には私がここで書いたような点に触れている。「なるほどこのような手があるのか」という指摘にはまだ出会えていない。

文 献

須川恒(2006)冠島とオオミズナギドリー生活史と標識調査.

ALULA(No.33,2006 秋号):24-29.

須川恒・片岡宣彦・山根みどり(2009).大阪自然史フェスティバル 2009『カラ

- ーマーキング調査が開く野鳥の世界』.ALULA(No.39,2009 秋号):38.
- 須川恒・片岡宣彦・山根みどり(2011)大阪バードフェスティバル 2010『カラーマーキング調査が開く野鳥の世界』 出展報告.ALULA(No.42,2011 春号):31-37.
- 須川恒(2016)大阪バードフェスティバル 2015『カラーマーキング調査が開く野鳥の世界』 ブース展示報告.ALULA(No.52,2016 春号):43-51.
- 須川恒(2017)ユリカモメのカラーリング調査は世界を結ぶー大阪バードフェスティバル 2016 ブース展示報告ー.ALULA(No.54,2017 春号):43-48.
- 山本誉士(2013)冠島でオオミズナギドリに装着したジオロケータで判明した越冬海域の一例(プレスリリースおよび追記).ALULA(No.46,2013 春号):32-35.
- 吉田直敏(1973)近畿地方における最近 10 年のオオミズナギドリの迷行落下(1962~1971) .鳥(22):60-66.
- Yoda K, Yamamoto T, Suzuki H, Matsumoto S, Müller M, Yamamoto M (2017) Compass orientation drives naïve pelagic seabirds to cross mountain ranges.Curr Biol. 2017 Nov 6;27(21):R1152-R1153.